

佛心

二〇二四年一月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会



年頭の辞

新しい年のはじめにあたり、ご挨拶申し上げます。

昨年も世界各地で地震・洪水・山火事など様々な災害が起こり、多くの方が被災されました。特にハワイ・マウイ島における山火事ではラハイナ本願寺の本堂が全焼し、メンバーの方々の被害も報告されています。ここに災害によってお亡くなりになられたすべての方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。皆さまが一日も早く、日常の生活を取り戻されますことを願っております。

また、2022年2月に始まったロシア連邦によるウクライナ侵攻はいまだに続いており、2023年10月以来、イスラエルとパレスチナの武力衝突では関係国を巻き込んで、民間人を含む多くの犠牲者が出ています。私がいま思い起こすのは、「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」

（『ダンマパダ』第129偈）というお釈迦様のお言葉です。

この世に生を受けた私たちは、いかなる理由があろうとも等しく人権が保障され、命が脅かされるようなことがあってはなりません。しかし、現実には世界各地で紛争やテロが勃発し、生存の権利が脅かされている人々が数多くおられます。平和主義を掲げる仏教徒である私たちは、お釈迦様のお言葉を深く心に刻み、国際社会の平和と安全に大きく貢献することが求められています。

さて、昨年は本願寺において3月29日より5月

21日までの5期30日間にわたり、「親鸞聖人御誕生850年立教開宗800年慶讃法要」をお勤めいたしました。ご参拝くださいました皆さま、お力添えを賜りました皆さまに心より感謝申し上げます。私たちが立教開宗800年の慶讃法要をお勤めできましたことは、時代や場所を超えて多くの先人の方々が、浄土真宗のみ教えを生きる支えとして、今日まで大切に受け継いでこられたからに他なりません。

これからもみ教えを聞き、それを支えとして、一日一日を大切に過ごしてまいりましょう。

2024年1月1日

浄土真宗本願寺派

門主 大谷光淳



明けましておめでとうございます。

これを読まれている人の中には、去年が楽しいことだけでなく、つらく厳しい一年を過ぎられた方もいらっしゃるのではと思います。そんな苦しい一年であったとしても、様々なご縁に生かされていることを知ると、自然とこの手が合わさります。

いまこの命が生かされていることを改めて考えると、ある昔話を思い出しました。それは今から600年ほど前、京都の大徳寺にいた一休宗純という臨済宗の僧侶の話です。

ある日、一人の老人が大徳寺の門を叩き、「一休さんはいらっしゃいますか？」と訪ねてきた。

一休は門へ向かい、「ああ、わしはここにいるぞ。こんな朝早くにどうした？」と尋ね

た。その老人を見ると、彼は赤ん坊を抱えており「ああ、一休さん。今朝、私の息子が赤子を授かりましてな。一刻も早くこの子をあなたに見せたかったんです。」

そして彼は、一休にその赤子と家族のために特別な仏語を手紙にしたためてほしいと頼んだ。一休は「それはめでたいことだ。私に任せなさい。」と言って部屋へ戻っていき、仏語を書いた手紙を彼に手渡した。

老人はその手紙を読むことを楽しみに、すぐに家へ帰っていった。しかし、家でその手紙を開けてみると、そこには3つの言葉が書かれており彼は動揺した。なぜならそこには、右から順に「親死ぬ。子死ぬ。孫死ぬ。」と書かれていたからだ。

老人は寺へ戻り、門を激しく叩いた。一休が現れると、老人は「私はありがたい仏語を書くように頼んだ。それなのに、あんたは気味が悪い言葉しか書いてないじゃないか！」と顔を真っ赤にして怒鳴りつけた。

しかし、一休は顔色ひとつ変えず、ただ一つの問いを彼に投げかけた。「よくよく考えてみてほしい。もしこの順番が変わったら、あなたはどうか

思うだろうか？」と。この言葉を聞いて、老人は初めて一休が言わんとしていることを理解した。

老人は息子が赤子を授かったことを喜びとても幸せでした。しかし、もしその赤子が先に亡くなったり、もしくは息子が老人よりも先に亡くなったとしたら、彼はどれほどの苦しみを感じるでしょうか。一休は、老いた者から順に死んでいくことの尊さを、その手紙を通して知ってほしかったのです。

600年前は権力争いが絶えないばかりか、疫病や飢饉などで多くの人がいのちを落とす時代でもありました。特に幼子の死亡率が非常に高く、子どもが無事に生き延びられることは、親にとって大きな喜びであり、健やかな成長を願わずにはいられないものでした。そのため、老いた者から順に往生していくことが、いまよりも大変難しくも尊いものだったと言えます。

現代社会が生み出した医療技術や栄養価のある食生活により、人の平均寿命は600年

前に比べて格段に伸びました。私も人の死別に立ち会うのは、ほとんどが歳を重ねられた方々です。しかし、そんな中でも病気や事故などにより往生された若い方の法要を執り行うこともあります。

6年前、私がこちらに着任して2年目のことでした。ある晩、電話が鳴り、翌朝一番に火葬場へ来てほしいとの依頼がありました。火葬場に着きますと、そこには21歳の女性の遺体が棺桶に納められていました。彼女は日本からワーキングホリデーでカナダに来た方でした。カナダで懸命に英語を学び、カナダ人の友達を作り、楽しい時間を過ごしていたようです。しかしある日、交通事故に遭い、突然いのちが絶たれてしまった。

火葬場には彼女の両親が来ており、母親の目は真っ赤になっていました。日本からカナダへの飛行機の中でずっと泣かれていたことがうかがえました。我が子を亡くした家族の苦しみは計り知れないものです。しかも、このご両親がカナダに来たのは、愛する娘の遺灰を引き取るためでした。

ご両親は棺桶にそつと手をのぼし「ごめんね。痛かったね。痛かったね。そばにいてあげられなくて、ごめんね。」と涙をこぼし何度も何度も娘に声をかけていました。

私は普段、仏事を執り行う際、たとえばそれが友人や知人の葬儀であったとしても、その間は泣かないようにしていました。なぜなら、儀礼を執り行う僧侶が感情を乱してしまつては、一番苦しいはずの遺族に気を使わせてしまうと思っていたからです。しかし、その時は涙が止まりませんでした。

そして自分の無力さを目の当たりにしました。なぜなら僧侶としてだけでなく一人の人間としても、その家族にかける言葉が見つからなかったからです。普段サウンダーサービスで「諸行無常」や「一切皆苦」などを説いてきました。しかしそれは頭の中だけで理解していたことであり、こころの中で受け止められてはなかったのです。

なにも声をかけられないまま時間だけが過ぎていききましたが、お勤めの最後、彼女の父親から「いままでありがとうね」という言葉

と同時に「南無阿弥陀仏」のお念仏が聞こえてきました。大事な娘が亡くなったことは、ご両親にとつて到底受け入れられないことです。そして、それは時間が経てば解決するものでもありません。しかしそのような苦しみのなかでも、最後に「いままでありがとうね」とお念仏と一緒に言えるのは、あとは仏さまにおまかせしようというこころの表れだとも思います。

この火葬式のことを思い出すと、先ほどの一休宗純のお話と、蓮如上人が書かれた「白骨章」の一節を思い出します。

『されば、朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。既に無常の風来りぬれば、すなわち二の眼たちまちに閉じ、一の息ながく絶えぬれば、紅顔むなしく変じて桃李の装を失いぬるときは、六親・眷属集りて歎き悲しめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙と為し果てぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。(略)あわれというも中々おろかなり。されば、人間のはかなき事は老少不定のさかいなれば、誰の人も、はやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀

仏を深くたのみまいらせて、念仏申すべきものなり。』

「私が人より先に逝くか、人が私より先に逝くか、それは今日か明日か。私たちは、朝に元氣な姿があったとしても、夕べには白骨となってしまうような身である。無常の風に吹けば、この二つの眼はたちまちに閉じ、息は絶え、その生きていたすがたを失ってしまう。そうなるまえに、家族が集まって嘆き悲しんでも、このいのちの定めはどうしようもできない。(略)それはもう言葉にもいい尽くせない悲しみである。いのちというものは、老いた者から先に逝くわけでも、若い者が後から逝くわけでもない、決して定かなものではない。だからこそ、この世でのいのちが尽きたときの一大事をここに留めて、仏様のお慈悲をこころの拠り所とし、一緒に念仏申し上げましょう。」

この法話の冒頭にも書きましたが、去年は楽しいことばかりでなく、つらく苦しい一年を過ごされた方々もいらっしゃると思います。それでも、様々なご縁に生かされていることを知り、いまある定かではないこの命の尊さを噛み締めて、今年も一緒に合掌できる日があればと念ずるばかりです。

駐在開教使 大内祐真

法要のお知らせ

祥月法要（2023年1月7日）

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。

日時：2023年1月7日（日英両語：午前11時から）

場所：トロント仏教会 / Zoom

※Zoomでの参拝を希望される方は、その旨を
<tbcc@tbcc.on.ca>までお知らせください。

寺院事務所からzoom link を送らせていただきます。

※故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さい。



（！）第一日曜日の1月7日にハミルトン仏教会の祥月法要が午後から入っているため、日英合同の午前11時から勤修します。